

人類史上、まれに見る時代が到来している。古い時代が終わり、新しい時代が近づいていることは誰にも明白である。我々は、崩れ去る過去と、定まらぬ未来との狭間で、バランスをとりつつ立っている。既存の指標がひとつ、またひとつ消え去つて行くのを見ながら、水平線上のあらゆる方向に無限にひろがる大海に漂つているような感覚におそわれている。

確かに、人類が生き延びるために、通常の連続の結果として生ずる進展だけでなく、意識における質的飛躍が必要であり、既成概念の再構成だけでなく、認識にお

けるパラダイム（規範）の根本的変更が必要なのである。人類は、今、本質的な岐路に立たされている。かつて、この地球上で長い、苦しい歴史を綴りながら、様々な大変動を経験してきたが、これほどまでに重大で困難な大変動に直面したことはない。

このような地球社会全体の大変動は、かつてなかった。

この大事件はあまりにも身近に迫りすぎて、我々はその途方もない重大さを正しく把握することができないのかかもしれない。しかしそれを示す徵候は極めてはつきりした形で現れている。

■ ジャワ・ハルラル・ネルー生誕百年記念表彰（インド国民科学協会）における講演から



地球社会への移行 二〇〇一年から始まる一千年にふさわしい法を求めて

カラーン・シン

この五十年間の急激な科学技術の進歩によって、地球上の生活は、あらゆる面で一つの社会へと収斂していく過程にある。このことは、身近な現象を少しでも観察してみれば容易に分かることである。

かつて、トーマス・マンは、「人類が政治に引きもどされるのが、この時代の宿命である」と語った。政治活動は、公共生活の様々な側面の中でも、最も顕著なもの一つであろう。そして、ウエストファリア条約にその原形を見せる、現在の国家 (nation state) が、過去数世纪にわたり人類史の主流であった。しかしながら、現在では、その国民国家自体が相反する二つの力によって解体されつつあるのである。

つまり一方では、民族主義は超克されつつあるのである。その最も劇的な例が歐州統合への動きである。この動きは驚異に値すると言つても過言ではない。過去、歐州諸国は何世紀にもわたって激しい戦いを繰り返し、その霸権争いが、何度も世界を殘虐の限りを尽くした戦争に引きずり込んで来た。しかし、今や過去何世代にもわたる憎悪を克服して、様々な検討すべき問題点は残しつつあります。

裁体制によつて人工的に構築された体制を解体しつつある。それは、自分たちの民族と宗教のアイデンティティーを主張しようとする動きである。

旧ソ連邦が内部から音を立てて崩壊していくことは、実に特筆すべきことである。なぜなら、それは冷戦という歪んだ二極構造によつて地球社会形成への必然の流れを塞き止めていた体制を粉微塵に打ち碎いたからである。

もし、この体制が続いていたならば、社会の発展は凍結され、政治的進歩を生み出す力も動きを止められたままとなつていたであろう。大統領としての地位を失うことにならうとも、強力な民主化への力を開放したミハイル・ゴルバチヨフの功績は、人類史上にその名を不朽のものとして残すことになった。共産主義の終焉は、実はポスト・モダン（脱近代）の歴史の“始まり”であり、一部の人が指摘するような歴史の終りではないのであるが、はるかにむごたらしく、凄惨な状態にある。そ

つも、純粹な意味での“経済的な生き残り”という論理にせかされつつ、一つの経済単位へ、究極的には政治統合へと向かつてゐる。

他の地域のグループ化もゆっくりとではあるが、同じ方向に向かつてゐる。S A A R C（南アジア地域協力連合）も恐らく同じ道をたどるであろう。

したがつて、現在、二百ほどの国家が混沌とした状態で存在しているが、ここ数十年の内に、十とか十二といつた地域グループにまとまっていくことも考えられるのである。さらに、これらの地域グループが統合されなければ、二十一世紀の終りまでには、テニスンが「人類の議会——世界連邦」といみじくも述べたような連合体へと結実し、「合一」の新しい精神が人類全体を包含するであろう」と、一九四七年八月十五日にシユリー・オーロビンドが述べた展望を具体化することになるかもしれません（訳注：この日はオーロビンドの七十五歳の誕生日であり、またインドが独立した日であった）。

さて、もう一つの力は、東欧と中欧における民族国家、あるいは表現を変えれば、マルクス・レーニン主義の独

立たれてゐる。しかし、つきつめて言えば、共産主義が崩壊して、旧ソ連邦やユーゴスラビアが解体したことが、一つの地球社会への移行という流れと矛盾するものではないことは明らかである。

現在起きていることは、長い間共産主義イデオロギーの支配下にあった各民族が、民族主義を克服する前段階の試行錯誤をする期間を必要としていることを示している。したがって、共産主義は、地球社会への移行をせいぜい遅らせるということはあっても、長期的に見れば、地球社会への移行の流れを逆戻りさせることはできなかつたのである。

政治は、地球社会へ移行する途中の段階にあるとして、経済活動の方は、ずっと以前から、国境を越えて展開されている。経済と金融の分野での意志決定が、地球的規模で人類に大きな影響を与えている。特に多国籍企業の台頭は、地球社会形成への強力な推進力となつてゐるが、これによつて、国家間の壁は急速に崩されていくであろう。

経済上のやむをえない事情から、西欧諸国は統合への道を歩んできたのであるが、このような傾向が他の地域にも波及していくのは避けられないであろう。

気の遠くなるほど長期にわたつた「ウルグアイ・ラウンド」交渉を経て、GATT（関税と貿易に関する一般協定）

加盟国による新たな合意が成立し、世界銀行と国際通貨基金は、レーガン元大統領がかつて「市場の魔術」と呼んだ、自由な貿易体制の実現を誇らしげに宣伝している。その魔術が白と/or 黒と/or かは、もちろん、経済の内実いかんによるのであるが、ともかくも、これまで述べて来た観点から見れば、世界経済という枠組みの中では、国境はますますその重要性を失い、こういつた流れが、地球社会実現に向けての強力な推進力として作用していくことは明白なのである。

環境問題は、当然のことながら、地球規模の問題である。一九九二年、リオデジャネイロで開催された歴史的意義を持つ国連環境開発会議（地球サミット）は、この事実をきわ立たせる会議であった。

これに先立つ二十年前、わずか一人の首脳——主催国スウェーデンのオロフ・パルメ首相とわが国のインディラ・ガンジー首相——しか出席しなかつたストックホルム会議（国連人間環境会議）から思えば、二十年後の今日、地球の温暖化、オゾン層の破壊、川と海の汚染、二酸化炭素の排出問題、生物多様性保存の問題、森林の喪失と

砂漠化などの問題を一部の地域だけで解決することはできないという認識が、完全に普及したのである。

このような認識に促され、リオでの地球サミットには、世界から百を超える国家・政府の首脳の参加を見たのである。環境問題とその解決のためには、地球的視野をもつて取り組まなければならないという共通認識が出来てきている事実こそは、一つの地球社会が急速に形成されつつあるという、目に見える確かな現実の証拠なのである。

全世界の様々な緑を守る運動や環境保護運動にたずさわる人々は、ある意味では地球社会へと意識を変革していく先駆者であろう。ほんの二十年前においてすら、一風変わった、異端的な運動とみなされていたものが、舞台の中央に踊り出で來た故に、世界各国の政府は彼等の主張も考慮にいれざるを得なくなつてきたのである。

この地球という惑星を全体で一個の生命体と考え、太古のカオスの大海上から今日ある有情なるものにまで育んできた母——これをギリシャの伝統では *gaiā*（大地の女神）と言い、ヒンズーの伝統では *bhavānīvāsudhāra*（生

き物の土地）——と考えれば、確かに、このようないい思想は、地球社会実現への大きな力となつてゐる。

宇宙から撮影された地球という惑星の比類なき美しさは、目覚めゆく地球主義の象徴となり得るものである。

それは、初めて鏡に映つた自分の顔を見るようなものである。我々の惑星地球は、まさしくその写真のまま、無限の外界の宇宙の中にあって、一つの小さな点のこととき光と生命のきらめきを見せ、あまりにも美しく、こわれやすい。

地球社会の実現を促進するものの中でも、最も強力なもののは、宇宙探査と衛星を活用する技術の開発による多用な通信の分野の革命であろう。

ユーリ・ガガーリンが初めて宇宙という障壁を破り、ニール・アームストロングが月面に人類の第一歩をしたとき、彼らは、まったく新しい方向を人類史という地図の中に書き込んだのである。科学技術によって達成された偉業は、世界を震撼させるのに十分であつた。

スタンレイ・キューブリックの傑作である『二〇〇一年宇宙の旅』に劇的に描かれているように、この地球と

いう惑星の一生物が、洞穴での生活から宇宙ステーションに至るまでの驚くべき大転換を十萬年足らずの間に成し遂げたことは、驚嘆に値する。

人工衛星による宇宙探査によつて、様々な応用技術がもたらされたが、最も重要なものはラジオと、さらに劇的には、テレビなどのコミュニケーションの分野である。最近のケーブル通信ネットワークの発達によつて、世界の広範囲の地域において、人間の意識の変容が起きている。

たとえば、世界の各地に散在する何百万人という人々が、同時に同じ番組や事件を目撃することが可能になつた。地球全体がこれほどまでに意識を一つの事に注ぐような状況は、歴史上かつてなかつたことであるが、その影響については、現在のところ予測不可能である。

テレビがもたらす文化面での影響にも多大なものがある。人類史上初めて、英語という世界言語が出現した。これは、世界文明の成立に不可欠な要素である。英語が他の言語に取つて替わつているわけではなく、英語は世界の様々な言語・民族をつなぐ共通語としての地位を急

速に獲得しつつある、ということである。

同様にロック・ミュージックも、初めての真の世界音楽として出現してきた。ニューヨーク、ニューデリー、ボンベイ、北京、レイキャビーク、リオデジャネイロ、どこであろうと、若者たちが同じビートで踊つてゐる。同じく、ジーンズは、世界の若者に共通なユニフォームとなり、コーラは世界の清涼飲料になつてゐる。

もちろん、これらの現象は価値判断を伴うものではない。数多くの人々が、今後ともビートルズよりもベートーベンを好み、コーラよりもシャンパンを愛飲するといふことはあるだろう。要するに、音楽であれ、清涼飲料であれ、人気のあるブランドが、大衆に影響を与えるながら、急速に全世界に広がり、地球社会実現の基盤を形成していることは間違いない。

国境と言語の障壁を突き崩す、もう一つの強力な影響力を持つてゐるのが、ジェット機時代の旅行である。年間の総売上げ高で石油産業や兵器産業さえも凌駕する、世界最大の産業とも言うべき旅行業は、今や、毎年海外を訪れる数百万の人々をも顧客とした。

工業技術の奇跡的な革新がそのものであるジェット旅客機の開発によつて、大量の旅行者の輸送が可能になり、異なる人種・宗教・言語・民族の人々を、人類がいまだかつて経験したことのない形で、結びつけることになつたのである。

例えば、最近中国の万里の長城を訪れたとき、我々は、少なくとも十一ヶ国からの観光客と出会つたが、その人々は、それぞれ全く分からぬそれぞれの言語を話していた。タージ・マハールや自由の女神を見物しに行つても、同様の体験をすることは間違ひないであろう。

地球上を縦横に行き交う旅行者たちは、いわば、この地球という惑星に急速に普及しつつある地球意識といふ新しい織物でできた服の縫糸と横糸である。

今まで述べたすべてのことがらが、未曾有の、後もどりが出来ない地球社会実現への流れをつくつてゐるのである。この流れが、善かれ悪かれ、容赦なくこの地球に住む人々に影響を与えていく。

樂観的な予測は、大きく揺さぶられ、その根拠を問われている。我々は大変動の嵐に見舞われ、いや應なしに

一つの地球文明へと押しやられている自分たちに気付くのである。かつて人類は、長い歴史の中で、幾多の変化を経験してきたが、地球社会への変化の流れは時間の流れの速さという点で、これまでの変化とは異なりユニークなものである。

かつて、社会の変化は何世代にもわたる、長い時間の間に起きたものであつたが、今起きている変化は、時間自体が圧縮されている。その結果、アルビン・トフラーが「未来の衝撃」(future shock)と呼んだ現象が一般化している。

我々の惑星地球上に大変動をもたらしている衝撃的な変化のほとんどすべてが、ここ五十年の間に起きていているということは、驚嘆に値する。五十年という時期は、今この地上に生存しているほんの二世代の人々の記憶の範囲に収まる長さなのである。

原子力やジェット機による輸送、テレビやコンピュータの普及、ロボット工学や臓器移植、衛星を使った通信技術や宇宙旅行、遺伝子工学やサイバнетイクス、そして、更に、多くの革命的な科学技術上の発展が、我々

自身が生きている間に行われたのである。

あまりにも急激な変化であるために、多くの人々は、
果然として、何をしていいのか訳が分からなくなつてい
る。

地球社会が、その大変革のおびただしい徵候を示しつ
つ、急速にその全貌を現しているのとは対照的に、その
一方では、地球社会の前段階に凍結されたままの発想し
か出来ない何百万という人々が存在している。この“時
差”の存在こそ、今日の世界を、奇妙なまでにどつちつ
かずの不安定な状態に追いやついている主たる原因なので
ある。このような世界においては、相矛盾する運動と勢
力が同時に現出してくるという驚くべき現象が見られ
る。

世界化を指向する徵候のすべてが、前向きなものでな
いことは明らかである。

世界化それ自体が、もともとの変化を増幅するので、
もし、その変化が悪い変化であれば、より悪質なものと
なつて全世界に広がることになる。テロ活動が地球的規
模に拡大し、テロリスト・グループが核兵器を入手し、
著しく損ない、重大な脅威となつてゐる。

世界的に広がっているエイズ（後天性免疫不全症候群）

は、この十年間で本格的な取組みが必要な段階に入つて
おり、国籍、宗教、性別、性的嗜好といった差異を越え、
すべての大陸において爆発的な流行を見せてゐる。

現在の予測が信頼できるものであるとすれば、今世紀
の終りまでに、地球上で数千万人がH-I-V（ヒト免疫不
全ウイルス）に感染し、それが原因で、毎年数百万人が
死ぬことになる。アフリカの何ヶ国かは、人口の約三分
の一を失い、その結果、国家の生産能力が著しく損なわ
れ、経済発展のための計画が挫折する恐れがあると危惧
されているほどである。

エイズが人類にもたらした肉体・精神両面にわたる激
しい苦悩は、実に、世界全体に課せられた悲劇の重荷で
ある。

悪意をもつて使用する可能性が出てくる。それはまさに
悪夢であろう。

麻薬の取引は、社会の基盤そのものを脅かすまでにな
つていて、少なくとも二つの国においては、国家そのも
のの存在が脅威にさらされている。莫大な利益を生む麻
薬取引は、中毒患者と麻薬犯罪を急増させ、邪悪な裏の
世界を代表するものであるが、絢爛豪華な西洋文明の
“陰”の部分をなしている。麻薬犯罪の世界化は、容赦
なくその触手を伸ばし、発展途上国の中を侵蝕してい
る。

個人、集団を問わず、暴力は、全世界的に広がつてい
る。テレビは、確かに一面では素晴らしい効用があるに
しても、しばしば、ぞつとするような暴力と恐怖を伝え
る媒体となる。しかも世界中の何千万という家庭に放映
されているのである。

テレビ画面に映される映画の暴力場面には、悪に対する
自虐的なアプローチは言うに及ばず、凶悪、恐怖、そ
の他人間の精神をおとしめる、ありとあらゆるものが出
てくるので、全世界の人々の精神の健全さと平衡感覚を

過去数十年で性に対する社会通念は、大きく変わつた
が、性行動の中でも、特に顕著になつてきたのが、西洋
社会に大きく広がつてゐる性的放縱である。これも、世
界化の波に乗つて、ポルノ・ビデオが家庭に侵入すると
いう形で世界に蔓延してきている。インドにも、確かに、
「カーマ・ストラ」のような性典は存在するが、その
行為そのものは、プライベートになされるべきものであ
り、裸体を一般向けのテレビ画面に写し出すといったも
のとは全くその性質を異にしている。

以上のように、世界化の流れは後もどりさせることは
出来ない。それに、歓迎すべき側面も数多くあるが、
同時に警戒すべき危険な暗黒の側面もある。

この負の側面を克服出来る積極的な意識を啓発しなけ
れば、世界化への移行そのものが挫折し、結局、人類は、
自滅への道をたどることになりかねないのである。

世界化への移行と、それに伴う変化について、思いを
めぐらせば、地球の世界化という現在のシナリオを、蝶
の幼虫が蛹になる時期にたどえることが出来るである
う。蛹の時期は、快いものではないであろう。恐ろしい

までの圧迫感と危機感に囚われるであろう。しかし、この苦しみの時期をくぐり抜ければ、地を這う一匹の醜い虫は、美しく、色とり鮮やかな蝶に変身し、虚空を自在に飛び回るようになり、もはや、葉の上をのたうちまわることもない。

世界化への移行が大過なく実現され、人類の意識（）のような変革が起こることを切に望むものである。史上最悪の暴力と残酷に満ちた今世紀も、急速にその終焉に向かいつつあるが、今、人類が直面している最重要の課題とは、その全貌を現しつつある地球社会を支えるだけの「意識」を、いかにして醸成していくかということである。

我々が必要としているのは、地球全体を包括する、思想的パラダイムとしての「法」である。この「法」の強調するところは、競争ではなく協力を、紛争ではなく収束を、快樂主義ではなく全体觀を、である。この「法」を追求するために、我々は、人類の偉大な精神的遺産にその源泉を求めることができよう。そこで、私は、その例として世界的に高い水準にある哲学の一つ、ウェー

（）の概念には、ある意味で民主主義の基盤となるべき考え方方が含まれている。なぜなら、すべての個人は、少

なくとも理論上は、個人がそれ以下の単位には分割できない存在であるというから、認められ、尊重され、そして、その個人によってのみ政治組織も成立可能となるからである。

ならば、各個人の心の中にもそれは存在している、といふ」とである。

「すべての人の心に内在する神性は、隠されてはいるが、発見する」とができるものである (*Iṣvarah sarvabhūtāṇīḥ hrdeśe tiṣṭhati Bhagavad-gītā 18, 61*)¹⁰。

（）の概念は、とりもなおさず、その意識の中に「神性」の輝きを秘める一人一人の個人に尊嚴を与える根拠となるものであろう。ウパニシャッド文献の中に、人間を意味する素晴らしい言葉である「不滅なるものの子供たち（amṛasya putrāḥ）」と云う表現がある。

人間は、自らの運命にもの言わないロボットやあやつり人形のような偶然の產物ではなく、「不滅なるものの子供たち」なのである。

（）の概念には、ある意味で民主主義の基盤となるべき考え方方が含まれている。なぜなら、すべての個人は、少

なくとも理論上は、個人がそれ以下の単位には分割でき

ない存在であるというから、認められ、尊重され、そして、その個人によってのみ政治組織も成立可能とな

ダーンダ哲学の普遍的概念について、手短かに論じてみたい。

破壊され、粉々になった現代人の認識に取つて替わるだけの、全体觀に立つ思想的パラダイムが提供可能である、ううウパニシャッド哲学から、五項目にわたって、基本的な概念を提示したい。

まず、「すべてには神性が浸透している」 (*īśā vāsyam idam sarvam yat kiñ ca jagatvā jagat*)¹¹、という最も基本的な概念である。イーシャーヴァースヤ・ウパニシャッドの冒頭の一一行は、一片の塵にすぎない地球と呼ばれる（）の惑星のみならず、際限無き宇宙（これをウパニシャッドでは「無数の梵卵」 [anantakoti brahmaṇḍa] と呼んでいる）の中に存在する何億兆という銀河群に至るまでの全宇宙に、「神性」が浸透していると説いていく。

いすこであれ、事物が顯現するところには、「神性」が現れているのである。これは、現代の諸科学者たちの追究する、統一場理論——一つの理論で全ての現象を説明する——とも哲學的関連を持つものなのである。

第一番目の概念は、すべてに「神性」が浸透している

（）の概念は、カーストや信条、性別や宗教、経済的立場や国籍・民族の違いによる障壁を超越するものである。ヴェーダーンタ哲学は、選ばれた人種、選ばれた人々、選ばれた性、選ばれた国家といった考え方をとるものでは決してない。全人類を対象とし、あらゆる個人に「神性」が内在しているとする偉大な原理を我々の前に提示しているのである。

第三番目の概念は、あらゆる個人に「神性」が内在しているのであれば、人類の歴史が始まつて以来のすべての争いや悲惨な出来事にもかかわらず、本質的には、人類はすべて広い意味で一つの大家族である、という考え方である。

インドの国会の入り口の門には、次のような見事な詩文が彫り込まれている。

「（）は我、それは彼、という物の見方は、未だ、卑少で、狭量な物の見方である。気高い心を持つ者たちから見れば、世界は一つの家族である。

(訳注 出典は Bhāgavata-Purāṇa 等)

「」の中の「世界は一つの家族である (vasudhavai
kuṭumbakam)」ところ一節は、今その形を現しつつある
新たな地球社会のモットーとなりうる言葉である。

徒歩で一日数マイル以上の移動が不可能であった何千年も前に、ウパニシャッドの先哲たちは、地球社会の精神的支柱となるべき、全人類を一家族と見る本質的な一体觀をすでに持っていたのである。

第四番目の概念は、すべての宗教の本質的一体性である。よく引用される「リグ・ヴェーダ」の一詩節(I.164.46.C)に、「真理は一つ。賢人たちは、それを多くの名で語りなす (ekam sadviprā bahudhā vadanti)」とある。

また、「ムンダカ・ウパニシャッド」の中の詩節には次のようにある。

「河川が世界の様々な場所から源を発するが、最後には、同じ大海に流れ込んでいくように、人類のあらゆる信条や宗教も様々に成立して来たものであるが、究極的には同じ到達点に至る。」

(yathā nadyah syandamānāḥ samudre astaṃ gacchanti

である。

偉大な伝統を誇る世界的大宗教が、圧倒的な影響を及ぼした天啓と靈感を表現しているとしても、すべての精神的真理を独占する」とはできるものではない。従つて、個人に内在する「神性」が民主主義を支える基盤をなしているのと同様に、すべての宗教は本質的には一つのものであるという考え方方は、宗教の多元的共存と世界的な宗教間協力運動の基調となる概念である。

すべての宗教に共通する要素は、個人を「神性」へと近づける力が存在する」とである。この力が存在する限り、いかなる宗教を信奉しようと何ら問題はない。ヴェーダンタ哲学は、現存する宗教に取つて替わろうとするのではなくて、世界の多様な宗教伝統を見すえる、まったく新しいパラダイムを提供するものなのである。

すべての宗教が、独自性を保ちつつ存続していく」とは当然のこととして、ヴェーダンタ哲学が示唆する」とは、そのようなすべての宗教が、「神性」を具現化するための方法論として尊重され、敬われるべきものであり、互いに敵対すべき存在ではない」ということである。

nāmarūpe vihāya

tathā vidvān nāmarūpād vimuktah parāt param puruṣam upeti divyam)」

ヒヘズー教は、雪深いヒマラヤ山中で生まれた。イスラム教はサウジアラビアの灼熱の砂漠で生まれた。その他の宗教も、様々に異なる場所、時代、また異なる経済・社会・政治状況の中で生まれてきた。しかし、一つの宗教上の「普遍的な」「神性」があれば、たまたま、異なる宗教の伝統の中で暮らして来た人々にとつても、究極的にその神格が、異なったものになる」とはないはずである。

「神性」から発する無限の光彩が、実に様々な現れ方をする」とは確かに、この慎ましやかな惑星の住人である我々人間が、「神性」は、特定の時代に特定の形態をとつてしか出現しない、と主張すれば、それは傲慢 (ahamkāra) の極みではないだろうか。確かに、「神性」の現れた個々の姿・形には、それ自体の妥当性があり、いかなるものであれ、特定の宗教形態を悪くいう意図は全く無いし、「神性」に至る多くの道がある」とも確かである。

「」のことが実現できれば、調和ある地球社会の建設に向かって、大きく前進する」とができるよう。

ヴェーダンタ哲学の第五番目の概念として、本日、私が皆様に申し上げたいのは、「多数の人々の繁栄と幸福 (bahujanasya bahujanahitāya ca)」ところである。ヴェーダンタ哲学は、個人の救済のみに关心を示し、貧困、病気、現実世界の様々な問題に対しても十分な関心を払わない、本質的に利己的な哲学である、という誤つた見方があるが、これは正しくない。

聖典「リグ・ヴェーダ」は、我々に人生の目的が「一つ個人の魂の救済と世界の繁栄 (ātmano mokṣārthaṃ jagat hitāya ca)」である。

「」の点を常に強調していたのがスヴァアーミー・ヴィヴェーカーランダであった。「清貧の神」(daridra nārāyaṇa)と彼が命名した奉仕活動は、困っている人を助けてお、感謝されることを期待せず、むしろ逆に、その人のお陰で、奉仕活動をすることができたことに感謝する」とを説く。さらに、彼は、飢えている人に宗教を説く」とは

侮辱である、とも述べている。

以上述べてきたように、ヴェーダー・ンタ哲学に社会的な意識が欠如しているのではなく、むしろ逆に、そのような意識が教える神體なのである。

その理由は、このような社会意識が出てくるものになる理論に従えば、すべての人間に「神性」が浸透しているのであるから、同胞たる人間に奉仕することは、とりもなおさず、神に奉仕することになるからである。

以上の五項目の内容は、普遍的な意味をもつていて。これらと類似した概念を他の大宗教の伝統から探していくことはできるだろうが、ヴェーダー・ンタ哲学に極めて明快に述べられているこれらの概念は、今日的意義という点から見ても素晴らしい、二十一世紀から始まる新たな一千年に向けての卓越した法を提供していると言えよう。

* * * * * * * * * * * * * * *
話を締めくくるにあたって、私をジャワ・ハルラル・ネルー生誕百年記念表彰の受賞者として選んで下さったP・N・シュリーヴァースタヴァ教授をはじめインド国民

科学会議の会員の皆様に感謝申し上げたい。

この賞金は、オクラで障害のある子供達のために優れたセンターを運営している、精神障害児福祉デリー協会 (the Delhi Society for the Welfare of Mentally Retarded Children) に寄付されることになっている。

ジャワ・ハルラル・ネルーは、数十年にわたって、わが国の政治と知性の分野における卓越した中心的人物として活躍し、インド独立後の十七年間、初代首相として政務をとり、政治の安定と社会変革と経済発展のための確固たる土台を築いたのである。

確かに、彼がこの世を去つてから、世界は大きく変化した。例えば、彼が社会主義と非同盟政策を説いたころの世界の情勢から見ると、現在の世界の状況は、考えられないほど大きく変化してしまっている。

それにもかかわらず、自由を求める運動とわが国が係わる対内・対外的な諸問題への展望を示した、その貢献は、現在においても重要な意味を持っている。また、今日のインドが直面する諸問題解決の糸口を得るためにも、彼の著作を学ぶことが重要である。

私事になるが、一九六七年、三十六歳のとき、閣僚の一人に指名された私は、デリーに来たのであったが、今では、この数字が逆になつて、私は六十三歳である。

この間、国内、海外に活動の範囲を広げてきた。そして今は、世界最大の民主主義国家の一市民である」とに誇りを感じる。同時に、自分自身を一個の地球市民と考え、地球上のどの場所にあつても我が故郷のように感じる所以である。

この感情こそが、ようやくその相貌を明らかにしつつある地球社会を根底から支える基盤となるべきものなのであるという確信を深くしている。

(カラーン・シン／インドヒンズー教連盟会長)
(訳／セッセン・インターナショナル)